

## 昭和の南海地震体験談

氏 名：久保田 美喜代(くぼた みきよ)  
生年月日：大正11年2月5日  
地震を体験した場所：広川町・自宅寝室  
当時の家族状況：義父、義母、夫の弟夫婦、娘  
(夫は前年に戦死)



### 1) 地震発生時の状況

当時24歳の主婦で、2歳の娘と自宅寝室で就寝中、強い揺れで目が覚めた。すぐ飛び起きて一緒に寝ていた娘の上に覆い被さり、揺れが収まるのを待った。初めて体験する揺れが長い時間続いた。

### 2) 津波襲来時の状況

地震の後しばらくすると、近所のおじいさんが「津波来るから八幡へ行けー！」と大きな声で言ってくれたので、身支度し、娘をおぶって外へ出た。他の家族は全員自宅に残った。昔から「地震で揺れたら八幡さんへ行きなさい」と言われており、津波の事も言い伝えとして聞いていた。

避難する際、足元が濡れた。道に、田んぼにゴミが溜まっていたと後で聞いた。ちょうど津波が来て、引いたところだったようだ。八幡神社までの避難路は川を渡ると早いので、そちらに行きかけた時、どこかの牛が3頭、こちらに向かって走って来た。「牛の方が危険な所を知っているのだ」と思い、牛と一緒に、遠回りになるが小学校を通り、神社に避難した。当時、避難路の両脇



は田んぼで、藁に火をつけ、足元を明るくしてくれていた。神社前の馬場にはたくさんの人が避難していた。夜が明け、白々してきた6時頃、家族が自宅からおにぎりを持ってきてくれたので食べた。

### 3) 家族の行動・被害

家族は自宅にいて無事だった。土地が高かったのと、堤防があったので、自宅前の道路に水が来たくらいで、家の中には入って来なかった。

### 4) 集落・周囲の被害

堤防のある街中は浸水しなかったが、切れ目の場所にあった耐久中学校や、川沿いにあった日東紡の社宅は浸水、または流失し、24名が亡くなった。子供を手だけでおぶって避難したおばあさんが、津波に足を取られ、手を離してしまい、2歳くらいだった子供が亡くなった。5歳の女の子が親に手を繋いでもらって外に出たが、津波の勢いで手を離してしまい、泥濁りの水の中で見えなくなって亡くなった。亡くなったのはだいたい子供とお年寄りだった。

耐久中学校では教材等が流失した。

#### 5) 地震・津波後の生活

余震が続き恐ろしくて自宅に戻りたくなかったので、娘を連れて神社近くの祖父母宅に2日間泊めてもらった。自宅に戻ってからは、被災した親戚の家の片付けを手伝いに行った。川沿いの家屋では荷車が座敷に流れ込んでいたり、中学校の教材のうつぼがタンスの中に入っていたり、何もかもが一緒に流され、勢いが激しかった事を窺わせていた。

ある女学生が親から貴重品を持たされ、1人で避難する途中で流され、持ち出し袋を落としたが、命は助かった。津波から1週間後に川沿いの家の茶釜の中からその貴重品が出てきた、という話を聞いた。自宅は被災せず、特に生活の変化は無かった。

#### 6) 次の災害への備え

高台の土地に引っ越したが、持ち出し袋を作り、避難訓練に参加している。

#### 7) その他

次の世代に伝えていくのは大事な事だと思っているので、小学校で講演をしている。災害が起こったら、両親や先生の指示をよく聞き、自分勝手に走りだしてはいけない、と話している。来年度の5、6年生の教科書に梧陵さんの話が載るそう。梧陵さんの堤防は大事に保存していかなければならない。若い人や町の人にもっと関心を持ってほしいと思う。